

2005年度

奈良佐保短期大学

ファカルティ・ディベロップメント

報 告 書

奈良佐保短期大学
自己点検評価室

はじめに

奈良佐保短期大学のFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動の一環として、ここに2005年度FD報告書を発行いたします。

本学においても、これまで、個々の教員レベルではいろいろな授業改善の試みがされておりますが、大学全体としてFDに取り組もうという動きが出てきたのはごく新しいことです。

最初に、FD についての概念を得るため、「FD とはどういったものか」「その必要性は何か」について、外部講師を招聘してFD研修会を開催し、それは「奈良佐保短期大学第1回FD研修会報告」にまとめました。

次いで、これまで教員個人が実施してきたFDへの取り組みをまとめ、お互いの情報や方法を交換、共有することを目的として、今回FD報告書を作成いたしました。この報告書の作成に当たっては、年度末のお忙しい中、専任、非常勤を問わず多くの先生方から貴重な報告を頂戴いたしました。厚くお礼申し上げます。

この報告書により、これからのFD活動がより積極的に、活発に行われていくこと、それによって本学の教育がより生き生きとしたものとなること、その結果、もっと活気ある授業を学生に提供し、彼らの勉学意欲を刺激し、ひいては本学の教育活動が実りあるものとなることを期待しております。

2006年5月

自己点検評価室長

澤田 博

目 次

生活科学科 生活福祉専攻

「レクリエーション活動援助法」	加藤佳津子	3
「家政学概論Ⅰ」	北口照美	4
「社会福祉概論Ⅰ、Ⅱ」	伊藤幸子	5

生活科学科 食物栄養専攻

「食品加工実習」	池内ますみ	6
「小児栄養」	上地加容子	7
「基礎栄養学」	藤本さつき	8
「人体の構造と機能Ⅰ、Ⅱ」	毛受真由美	9
「給食管理実習」	矢和多多姫子	10

幼児教育科

「英語表現」	浅野友子	11
「幼児理解」	石田伸子	12
「教育原理」	岸優子	13
「こどもの発達相談」	近藤真理子	14
「音楽Ⅰ（理論）」	澤田博	15
「造形美術」	柴田保子	16
「健康・スポーツ論」	関智美	17
「健康・スポーツ実習」	智原江美	18
「家族社会学」	中田奈月	19
「情報処理演習Ⅰ」	中村妙子	20
「乳児保育」	西村真実	21
「子どもと自然」	前迫ゆり	22
「養護原理」	松本しのぶ	23
「児童文化」	築瀬正子	24

専攻科福祉専攻

「形態別介護技術」	奥田真紀子	25
「リハビリテーション論」	本村清二	26

授業改善への試み				
科 目	レクリエーション活動援助法			
所 属	生活科学科	生活福祉専攻	氏 名	加藤佳津子
<p>I. 授業展開での工夫</p> <p>1. 「レクリエーション活動援助法」は理論の講義であるが、授業に集中させるため、90 分の授業に下記手法を取り入れ、変化を持たせながら展開している。</p> <p>① レクリエーション体験（例えば、ゲーム・ソング・ダンス・クラフト・ハンドベル合奏・伝承遊び・ニュースポーツ等々）</p> <p>② シミュレーション</p> <p>③ ロールプレイ</p> <p>④ 行事体験（例えば、キャンドルセレモニーなど企画、運営も含めての体験学習）</p> <p>2. 「学習プリント」の作成と活用</p> <p>① 毎時「学習プリント」を使用</p> <p>② 年度の初授業の時、テスト時に「学習プリント」のみ、持込可を予告し、毎時必ず、記入するよう周知徹底を図る。</p> <p>II. 板書での工夫</p> <p>1. 時間の短縮</p> <p>① 板書に時間を取られないようにするため、その時間の学習の柱や内容のポイントは、紙（短冊）に書いて黒板に貼り、補足することのみチョークで書くようにする。</p> <p>2. 分かり易い板書</p> <p>① 紙（短冊）も柱と内容のポイントを色分けするなどして、黒板を見れば、学習の大体の内容や流れが分かるように心がけている。</p> <p>※ 今後は、紙（短冊）ではなく、パワーポイントを使用すべく、目下、講習を受けたり、自学自習したりして習得中である。平成 18 年度の授業に間に合うかどうか???</p>				

授業改善への工夫				
科 目	家政学概論 I			
所 属	生活科学科	生活福祉専攻	氏 名	北口照美
<p>1. 講義にあたって</p> <p>「家政学概論 I」は介護福祉士養成課程の学生の必修科目です。この科目では、講義だけでなく演習を取り入れて行なっています。</p> <p>授業では、学生たちが自分の毎日の生活に結びつけて活かすことができ、同時に、自分の介護する人の日常生活に結びつけて考えることのできる内容を意図して、それらが学生の身につくことをめざしています。</p> <p>2. 授業における工夫</p> <p>講義の本質を、楽しく理解してくれることを第一に考えています。</p> <p>毎回の授業の初めに、学ぶ内容のもつ意義を伝え、今日の講義要点を示します。</p> <p>講義内容は、自分の日常生活、つまり、昨日の行動や先週の行動などというように、具体的な自分の生活を題材にすることで、内容を身近なものとして捉えて興味を持てるようにしています。</p> <p>この授業を通して、学生が自分の生活を振り返り、分析することで、自分だけでなく、まわりの人や生活空間、環境など、自分を取り巻く人やモノに対して興味を持つことを期待しています。</p> <p>具体的には、生活空間を考える場合には、ベッドや車椅子などの身近なモノについて、介護する者と介護される者という両者の視点に立って、人々の生活に必要なモノや空間を関係付けて理解するようにしています。</p> <p>また、プリントを配布する場合には図表を多くし、そこから読み取れることを、文章にまとめることを義務付けます。これにより、学生自身が達成感を得ることが出来ると考えています。</p> <p>学生参加型の授業になればよいのですが、教員の一方的なものになりがちです。質問があるかと聞いても学生からの反応は少なく、理解できているのかどうか判りません。そこで、毎回、講義の最後に用紙を配布し、学んだ事、新たな発見、意見や質問などを書いてもらうようにしています。そして、次回の講義で、質問への回答、補足や修正の他、漢字の訂正などを行います。これらのことは、授業の復習と確認につながり、授業への参加意欲に結びつくものと考えています。</p> <p>3. 授業の問題点</p> <p>近年、学生の学力の格差が開いてきていると感じます。また、とても熱心な学生がいる一方、なんとなく介護福祉士の資格を取得する、別に資格を取らなくてもよい、というように意欲の格差も開いていると感じます。毎回の授業の中で、何か一つでも、つかみとって欲しいと願っています。</p> <p>資格や就職につながる専門教育も重要ですが、基礎的学力や一般常識など、基礎科目や教養科目の充実も必要であると感じています。</p>				

授業改善への試み				
科 目	社会福祉概論Ⅰおよび社会福祉概論Ⅱ			
所 属	生活科学科	生活福祉専攻	氏 名	伊藤幸子
<p>社会福祉概論Ⅰ</p> <p>◇ 授業における全般的配慮</p> <p>社会福祉を初めて学ぶ学生に対し、社会福祉実践の実際の理解および専門知識の自己習得を心がけた。</p> <p>◇ 授業内容</p> <p>授業内容では次の3点から展開した。</p> <p>① 社会福祉実践の実際の理解として、教員自らのこれまでの体験から社会福祉実践における実際の事例を紹介し、それに関して客観的事実の説明（概要説明）と主観的感想をわけて記述させ、毎回提出させた。</p> <p>② シラバスに沿った内容に対して教科書およびプリントを用いた授業を行い、プリントを毎回提出させ、評価した。</p> <p>③ ②において学んだ専門用語について毎回用語辞典を用いて調べるという課題を出し、次回提出させ評価した。</p> <p>社会福祉概論Ⅱ</p> <p>◇ 授業における全般的配慮</p> <p>社会福祉概論ⅡにおいてはⅠをふまえた上で社会福祉の現状理解として新聞を活用し、自己学習をさらに発展させることおよび共通試験に向けた取り組みを行った。</p> <p>◇ 授業内容</p> <p>授業内容では次の3点から展開した。</p> <p>① 各自が社会福祉に関する新聞記事を選んでレポートを作成し、順番で記事紹介および感想を発表させた。</p> <p>② シラバスに沿った内容に対して教科書およびプリントを用いた授業を行い、プリントを毎回提出させ、評価した。</p> <p>③ 共通試験に向けた取り組みとして授業内容に関する毎回の小テストを行い提出させた。</p>				

授業改善への試み				
科 目	食品加工実習			
所 属	生活科学科	食物栄養専攻	氏 名	池内ますみ
<p>この科目は平成 14 年度の栄養士カリキュラム改正以前の学生までは栄養士の必修科目として取り上げられていた。本学においては、カリキュラム改正によりいったんなくなったが、その後平成 15 年度入学生よりフードスペシャリスト必修科目として再び開講されるようになった。食品加工の実際を経験することが大きな目的である。本学においては、専用の加工実習室はあるものの、食品加工を行うための機器類はほとんど揃っていない。また、いくつかの加工用の機械も食物栄養専攻を設置する際に揃えたもので、今では使えないものが多い。そのような中で、どのような授業を展開すれば、学生に食品加工について理解させることができるかということを考えながら、実習内容を検討してきた。</p> <p>現代の食生活に加工食品はなくてはならないものとなっているが、加工食品が作られる過程や製造の原理については普段あまり知る機会はない。以前であれば、家庭で作ることが多かった、味噌や漬物などの伝統的な加工食品も手作りする家庭は少なくなっている。そこで、大規模な機械を使わなくても家庭にある調理器具でできる加工ということを中心に実習を行ってきた。機械を使って自動的にできてしまうのではなく、自分の手で作ることを通して、その過程で起こる食品の性質の変化などを観察することで、食品についての理解を深めることができる。また、昨年より導入したフードスペシャリスト資格の認定試験の受験対策として、関連科目である 2 回生後期の「食品の官能評価・鑑別演習」や 1 回生科目の「食品材料学 (加工学を含む)」などの講義科目で学習したことを、実際の食品材料を目の前に置いて復習をする機会にすることで、試験のために覚えなければならない事項を、より覚えやすくすることができた。実習を行う際に基本の原理を説明するが、このときに、学習済みの内容について学生に質問をし、思い出させると同時に各授業科目を個々に捉えるのではなく、食品について 2 年間で学習した内容を総合して考える習慣を身につけさせた。本年は大学の敷地内に植えられているかりんの実を使って「かりんシロップ」と「かりん酒」の製造を行った。身近にある食材が加工により新しい食品に変わることを経験するための良い機会となったと考えている。</p>				

授業改善の試み

科 目	小児栄養			
所 属	生活科学科	食物栄養専攻	氏 名	上地加容子

2004年度から小児栄養を担当するにあたり、本学学生の学力・栄養の知識・食生活の状況など学生の実態を把握する必要があると考え、まず、1日分の食事摂取状況を記入させた。その結果、欠食する学生が多く、食事内容も十分なものとはいえなかった。このことから、小児栄養では、自己の食生活の問題点を知り、食生活の重要性を理解させると共に、小児における食生活の重要性を理解させるような内容を心がけた。また、授業内容が理解できているか把握するために小テストも実施した。そして、講義終了時に、受講しての感想を書かせた。以下に感想の一部を記す。

- ・ここまで深く栄養について聞いたのは初めてだったので、とても興味をもって授業を受けることができました。
 - ・授業で聞いたことをその日のうちに家族に「小児栄養で〇〇という勉強してん」と話したりして、家でも食への関心が高まったような気がします。
 - ・この授業を受けるまでは、かなり欧米的な食事が大好きだったけれど、今は日本食大好きになりました。これは正直、自分でも変わったなと思うことの一つです。
 - ・席が後ろの方なので、黒板が少し見えにくかった。(→今年度は、文字を大きく書くことを心掛けた結果、今年度のアンケートにはこのような記述は見当たらなかった。)
- 上記以外に、学生との会話の中で調理実習をしたいという要望があった。

2005年度は、昨年度の結果を踏まえ、1回目に口頭で「小児栄養で何を習いたいか」と質問したところ、調理実習という声が多く、3人の助手の協力を得て、1回実施した。調乳の仕方や離乳食の飲み込みについて、実際に体験することにより理解できたことが多かったように思う。また、1回目に学生の食事摂取状況をきちんと把握するためにアンケートを実施した。実施するにあたって、授業の効果判定もできるような項目を併せて組み込み、10回目に再びアンケートを実施した。アンケート結果は現在集計中である。そして、今年度も講義終了時に、講義を受講しての感想を書かせた。以下に感想の一部を記す。

- ・離乳食の授業は保育士としてだけでなく、将来自分が母親になった時にとっても役立つと思った。学校で習わなければ知らないままで母親になっていたと思います。勉強したことを忘れないように生かしていきたいです。
- ・ペースが速かったから、ついていきにくかったです。(→この意見は数人にみられた。)教科書に書き込むときは、黒板にも書いてほしかったです。分かりやすく楽しく教えてもらったので良かったです。
- ・授業を始める前にクイズのように前回の授業の復習ができたりするところがとても良かったです。時々、いろいろな質問を一人ずつにしていくのも緊張できていいと思います。

授業改善の試み				
科目	基礎栄養学			
所属	生活科学科	食物栄養専攻	氏名	藤本 さつき
<p>私の担当している『基礎栄養学』は、食物栄養専攻1回生の前期開講の必修科目で、ヒトのからだに必要な5大栄養素の働きや代謝について学ぶものである。1回生の前期では、短期大学に入りたてで、勉強の方法もよくわからないためか、日頃の学習をする習慣がないまま学期末の試験の直前で慌てて復習する学生が多く見られた。勉強不足のまま夏休みをはさんで時間が経過すると、内容をほとんど忘れてしまい、ますます後期に開講されるほかの科目へと応用していくことが難しくなっていた。限られた2年間で資格を出すためには最低限理解しておくべき知識や技術があり、卒業するまでにしっかりと実力をつけてもらうためには、1回生の前期のうちに勉強する習慣づけをすることが求められる。予習をする時間的な余裕はなくとも、復習は重点的にしっかりさせる目的で、課題を出すことを試みた。毎時間の初めに、前回やった内容について10問のテストを出すようにしてみたところ、前回やった内容について家でテキストを読むなど復習をする学生が増えてきた。ただし、日頃から学習する学生はほぼ満点を取るが、だんだん点数が低くてもあきらめて学習しないままテストを受ける学生が出てくるようになり、復習の動機付けとしては意味が薄れるようになってしまった。また、翌年にはテキストのひとつの章が終わるごとに章末問題を解く課題を出し、翌週に解説を加えた上で提出してもらう方式をとるようにした。他の科目で出されるレポート課題もあるため、学生にとっては負担が増える面もあるが、授業で学んだことを單元ごとに復習してまとめるきっかけとなり、次の章へ入った際にも理解できている学生が増えてきたようである。しかし、6月ごろになるとレポート課題を出しても提出期限を守れない学生が徐々に出てくるため、効果が薄れる感もあり、継続して学習する習慣をつけてもらうために、今後いろいろな工夫していきたいと考えている。また、日ごろの食生活について振り返るような問いかけや、実生活と結びつける内容を盛り込むことで、学生の集中力がなくならないように講義を進められるよう心がけている。</p> <p>また、『食品学実験』も同じく1回生の前期開講の科目であり、担当した当初は、午後からの一斉授業で比較的時間に余裕を持って実施していたが、学生数の問題で、午前・午後と2回に分けて調理実習と組み合わせて開講する形になり、時間が制限されるため、授業中に記録するプリントはなるべく表示仕立てで準備するなど、学生が短時間でも的確に記録しやすくなるようなものを準備するようにした。その中で、表にまとめたり、結果を記録する要点を学んだりしながら、レポートにまとめるコツを身につけ、後期以降の実験や実習のレポートで活かしていくことを期待している。さらに、計算問題に苦手意識をもつ学生が多く、計算問題の課題をだし、授業の後にできなかった学生には補習で解説を行っている。</p> <p>基礎学力の低下が指摘される一方で、社会人入学生で勉強熱心な学生もおり、学生の学力格差に対してどのような手立てができるのか、現在も模索中である。</p>				

授業改善の試み				
科 目	人体の構造と機能 I、II			
所 属	生活科学科	食物栄養専攻	氏 名	毛受真由美
<p>担当初年度であり、前期はスライド中心に授業をすすめた。</p> <p>図表だけでなく、重要項目もスライドにまとめ、アニメーション効果等を利用して、口頭で説明する形式とした。</p> <p>授業の進行は一見スムーズであったが、学生よりノートがとりにくい、との指摘があった。ノートを充実させたいという希望も多かった。</p> <p>後期は 初回授業において、ノート作成のモデルを示した。</p> <p>図表はスライドを提示したが、重要事項はあえて板書とし、図表をみながら 専門用語を板書して説明する形式とした。</p> <p>授業の進行は緩徐となるが、学生個々のノートは前期より活用しやすいものとなったようである。</p>				

実践力のつく実習をめざして				
科 目	給食管理実習			
所 属	生活科学科	食物栄養専攻	氏 名	矢和多多姫子
<p>① 科目の特性</p> <p>「給食管理実習」は、栄養士養成に必要な科目の中でも、卒業後栄養士として就職したときに業務に直結する科目である。本学卒業生の場合は、給食施設での現場作業に従事する可能性が高いので、実務的な能力と協調性を養うことを目標にしている。1 回生から受講してきた関連科目の実践編として、「栄養指導論」および「同実習」で学習した栄養摂取基準を基に、「給食実務論」で学んだ大量調理の献立や衛生管理を実践する場として位置づけている。</p> <p>② 実習の展開と指導態勢</p> <p>学生の自主性を尊重しながらグループで実習し、献立作成、材料発注、作業計画、大量調理など給食管理に関する一連の業務を体験させ、学内教職員に販売提供することで、栄養士としての達成感を実感できる実習をめざしてきた。</p> <p>複数教員による指導態勢をとり、今年度は助手も含めて5人の教員が関わった。最終的な大量調理をするグループと、計画段階の試作や発注計算などをするグループに分け、それぞれに各時限の実習内容を設定して分担して指導した。</p> <p>③ 実習の内容と課題</p> <p>献立の立案にあたっては、何度か自主的な試作を繰り返しながら改善を加えて完成させた。自分たち本意の嗜好に傾くこともあるが、学生の日常の食事内容から考えれば、食品のバランスや調理方法のバリエーションなどを考慮していて、教育の成果が現れていると考えられる。できるだけ、学生同士で意見を出し合っ、まとめさせることが望ましいと考えているが、時間的余裕のない時に教師の意見を押し付けたことがあって反省している。</p> <p>近年、学生の基礎学力が低下し、計算が苦手な学生が多くなっているため、材料の発注量や単価などの計算の指導が困難になっている。作業の分担計画は提示しているが、現実的には一部の意欲的な学生に偏ってしまう傾向があり、グループ実習の問題点である。計算力や数的理解力は、栄養士には欠かせないので、現在は2回生の就職試験対策として、ゼミの中で計算練習を取り入れているが、1回生時点から基礎力を養う補習を設定できないかを検討したい。</p> <p>調理は好きな学生が多く、技術的な能力差はあるものの互いに補い合いながら協力することを学んでいる。実習設備の老朽化に苦慮しながら、衛生面の管理に厳しい指導を心がけている。</p> <p>給食における栄養士の基本的業務として「食事を提供すること」を体得する実習として充実させていきたい。</p>				

授業改善の試み			
科 目	英語表現		
所 属	幼児教育科		氏 名 浅野友子
<p>授業改善の目的</p> <p>外国語の授業改善について考える際、保育士、介護福祉士、栄養士等の資格を与えることを主たる目的とする短期大学における基礎教養科目の一つであるという位置付けから、出発することが必要である。本学の学生が将来英語を駆使する職業に付く可能性は高くなく、また、学生自身もどちらかという英語が苦手であるという意識を持っている場合が多い。このような状況にあつては、授業の受け手である学生が英語という外国語に興味を持ち、将来にわたって、外国語とそれを話す人々に関心を持ち続けるようになってくれるような授業を行うことが肝要であろう。教員としては、何よりも、学生が充実感を感じることができるよう授業をこころがけている。そのためにここ数年の間常に配慮してきた点のうち、二つのことについて紹介したい。</p> <p>① 教科書の選定</p> <p>長文を中心とし、読むに足る内容のあるものを選ぶようにしている。学生の興味を呼び起こし、英語を読むことの楽しさを感じてもらうためには、無味乾燥な練習帳のような教科書ではなく、英米に限らず、外国の文化・歴史に関するある程度の水準の文章に直接ふれる機会を与えるのがよい。また、本学では、学生が多くの基礎教養科目を受講できるほどの余裕がないことが多いので、英語表現という科目の中で、文化的・歴史的な教養に関わる内容も盛り込んでいく必要がある。授業においては、必要に応じて内容を説明し、理解を助けるための背景説明、さらに、ビデオなどの映像資料も活用している。</p> <p>② 表現力の養成</p> <p>外国語を学ぶための様々な方法のうち、最も力がつくのがその言語による作文である。ある日本語の文を英語で言える、書けるということは、大きな満足感を与える。そのため、授業においては、できるだけ英語を書く機会を多く設けるようこころがけている。具体的に言うと、まず、教科書の英文の中から応用範囲の大きい表現を取り上げ、その文の成り立ちを説明する。この時に最低限必要な文法の説明も行う。その後、その文を利用してどのような日本語の意味が表現可能か、例文を多く板書しながら説明していく。最後に一つ、例文と同様の考え方で書ける課題を出し、自力で英文を書く練習をしてもらう。一から考えては到底解答に届かない課題も、この方法で行けばきちんとした英文に到達できる。</p> <p>以上のような点に配慮しつつ、授業を行っているが、学生は、半期の授業が終了した時点で、今まで知らなかった知見を得、また相当多くの表現を応用することができるようになっていたことを発見し、満足感を持ってきているようである。</p>			

私の授業改善			
科 目	幼児理解		
所 属	幼児教育科	氏 名	石田伸子
<p>幼児を理解するうえで、必要な事柄を出来るだけ具体例を挙げながら、講義をしてきた。実際に幼児と関わる機会の少ない学生には視覚に訴えるほうがわかりやすいと考え、本年度はビデオを交えながら、話を進めてきた。毎回講義の最後に記録する提出カードの中にも、実際の幼児の動きや保育者の対応が見られるビデオは好評であった。幼児の動きを再度確認しながら、グループで幼児の行動を分析することが、行動の裏にある心の動きを読み取る練習にもつながった。本の中から学ぶことも多くあるが、直接触れる体験が大切である。幼児との関わりから、幼児について学ぶことが多く、幼稚園教育実習をする前と後では望ましい幼児像にも変化が見られた。昨年教育実習に行く前にとったアンケートの内容と、今年度実習を終えてからとったアンケートの内容を比較してみると、結果に見られるように、実際幼稚園で幼児とともに生活したり、教師の対応から学んだことなどから幼児に対する思いや考えが違ってきており、ただ漠然と子どもとは、このような姿が望ましいと考えているだけでなく、実際の子どもの姿から見えてきたものがあるように思われる。子ども同士の関わりや、生活するうえで大切な事柄も見えてきたようである。ビデオによる学習、実際保育現場での経験を生かしながら、幼児理解に迫っていきたいと考える。</p>			

授業改善の試み			
科 目	教育原理		
所 属	幼児教育科	氏 名	岸 優子
<p>本科目は、教職科目であり教育職員免許法施行規則で規定されている「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」と位置づけられている。</p> <p>本学での「教育原理」については、学生が保育を中心としたさまざまな専門科目を履修し、かつ実習を80%終えた段階で、二回生の後期に履修することになっている。カリキュラム履修上、さまざまな保育の知識を習得し、実習体験を経験してきた学生には、理論的に「教育的営為」について自分なりの教育観を確立し、これまでの学習をまとめる絶好の機会となっている。</p> <p>1990年代以降、教育界では新教育観が支持され、学習者は「知識・技術の習得」よりも「学ぶ意欲・興味・関心」を尊重した教育が重視されるようになってきた。この潮流を受けこれから社会へ出て活躍する世代の学生にとって、大学だけが旧態の教育方法で教師が知識を一方向的に注入する授業形態は、ふさわしくないと考える。</p> <p>このような考え方で授業改善の取り組みとして心掛けていることを挙げてみたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 配布資料は、現実社会の教育の動きを感じとれるように最新のものを提供すること。 2. 多様な映像（DVD, VHS）を活用すること。 3. 付箋紙、カード等により学生同士の意見交換を深めること。 4. グループ学習、討論、パネル発表を取り入れることにより、学生の問題意識を高め自ら学ぶ意欲を支援すること。 <p>例えば今年度は、学生が今後よりよい保育者・教育者になるため「子ども理解」をいかに深めることができるかということを目指し取り組んできた。評価された取り組みについては、「学生展」へのパネル展示としての参加も視野にいれている。</p> <p>授業改善の取り組みの結果、次のような成果があったと考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学生ひとり一人が、積極的に問題意識をもって授業に臨むようになったこと。 2. 授業時間外にも質問に度々来るようになり、個別指導もでき、よりきめ細かな学生指導をすることができたこと。 3. 学生は、様々な考えを知ることにより、ものの見方をひろめることができるようになったこと。 			

授業展開における試み			
科 目	こどもの発達相談		
所 属	幼児教育科	氏 名	近藤真理子
<p>子どもの発達に関わる親との相談活動、あるいは子どもとの直接的な関わりにおける発達等の遅れの早期発見には、保育者自身の関わる力、相手を理解する力が求められる。しかし、学生自身が友人等との関わりの中ですら、相手を理解したり、理解されたりという関係が希薄になっているのではないか、という仮説に立ち、理解するということ、そのためにきくこと、みること、話すことの困難さやおもしろさを講義の中で実感させ、現場での今後の取り組みに活かさせたいと考えて行った。</p> <p>① インタビューゲーム</p> <p>2人組で、15分づつ、交替でインタビューをさせ、その後、聞き取ったことを文章化してまとめさせた。</p> <p>普段、何気なく話している内容から、じっくり聞いてもらえる、あるいは話すと言うことを経て、自分自身や相手のことを新たに知ることができたようである。乳幼児との関わりとはいえ、知っているつもり、わかったつもりではなく、実際にきいてみるという活動が、おもしろいと同時に、わかったつもりで関わっては、必要な手だてができないということを実感させることができた。また聞き取ったことを書かせる作業も、「将来わかったつもりでおちょうめんを書くのは責任が重いね。」などといいながら、和やかな雰囲気、多くの学生が参加できたと感じている。</p> <p>② 詩のリレー</p> <p>灰谷健次郎氏の著作等から、1年生の詩を数点抜粋し、その詩に「お返事」を書かせた。その「お返事」にさらに別の学生が「お返事」を書き、さらにそのコメントに別の学生が続く、という具合に、言葉を拾ってつないでいった。</p> <p>ひらがなばかりの詩に「読みにくい」という声もあったが、実際彼らが関わるのは、さらに年齢の低い子どもで、短い言葉で感情や思いを受け取ることが難しいことを実感させた。</p> <p>自分の言葉へ他の子からのコメントがやさしかったこと、あるいは、思いが伝わっていなかったことなど、学生は本当に多くのことを感じ、とても静かに熱心にコメントをつけたり、読んだりしていたことが印象的であった。</p>			

授業改善の試み			
科 目	音楽 I (理論)		
所 属	幼児教育科	氏 名	澤田 博
<p>1. 授業目標の変化</p> <p>本来の目標は「楽譜を書く、あるいは読むうえでの約束（いわゆる「楽典」）を理解すること」であるが、高校で音楽を選択しなかった学生や、中学校までにこのような内容についての理解が十分でない（現実にはほとんど知らない）学生が多く入学してくるので、特に共学化以降は、楽典の知識としての成果を問うよりは、「楽譜を書くには約束があること。楽譜はすべてその約束に従って書かれている。」ということを理解する段階にとどめざるを得なくなっている。ピアノを長く習っている学生でも案外このことを知らない場合があり、音の長さの取り違いやテンポの不定など、楽譜を適当に読む一因となっている。</p> <p>2. 重点的に指導していること</p> <p>音楽の科目としての目標は「階名を正しく読む」ことであるが、筆記試験を含め、重点をおいているのは、字を正しく書くことである。</p> <p>実習目標やお礼状の添削、学外実習記録簿のチェックにおいては、書かれた内容もさることながら、書いてある字に問題（誤字脱字は論外）が多い。以前と違い、手書きを要求される場面が少なくなってはきているが、幼児教育科の学生の主たる就職先である幼稚園や保育所では、まだまだパソコンで作成した文書でなく、先生の手作りの文書が必要とされることも多い。</p> <p>筆順を理解していないために、バランスの悪い字を書く学生が多いということが、最近わかってきた。個人に対応する場面（実習目標の添削など）では、今後はこの点に留意して指導する必要があると感じている。</p> <p>きれいな字を書くことは社会的にも有用であるが、意図しているところは「他人に見せる字は丁寧に書くことを心掛けること」であり、その徹底のために試験においても同様の要求をすることとしている。</p> <p>もう一点は、「音を扱う授業なので静粛を要求すること」で、これは指定席に坐らせることでほぼ達成できている。</p> <p>3. 改善の成果</p> <p>長年、試験において「正しい字」を要求し続けてきたので、この点に関してはかなりの程度学生に周知されており、以前のように判読に困る字、ぞんざいな字を書く者はほとんどなくなった。「音楽 I (理論)」の試験においてはきちんとした字を書くようにしよう、という意識が学生に定着してきたものと見ている。</p> <p>私語についても皆無とはいえないが、甚だしい場合は厳しく処置することとしているので、(学生の言によれば) 他の授業に比べると静かであるらしい。</p> <p>4. 今後の方向</p> <p>楽典の知識の必要性については、「幼児にこれを教えるのではないから(この知識は)必要でない」という誤解をしている学生が多いので、これを改善しなければならないと考える。</p>			

授業改善の試み			
科 目	造形美術		
所 属	幼児教育科		氏 名 柴田保子
<p>「ウォーミングアップの大切さについて」</p> <p>制作が中心となる造形美術では、ガイダンス時に何人かの学生から「美術は嫌い」とか「絵は苦手」とか聞いた。そこではじめにウォーミングアップ課題を与えて、スムーズに制作に入っていく方法を考えた。</p> <p>・ウォーミングアップ課題1 「何も考えないで描いてみよう」</p> <p>なにも意図せず、何を描こうとも考えないで、ただ黒鉛筆で紙面いっぱい塗りつぶし、その後消しゴムででたらめに消していく。</p> <p>学生は意味が解らず、うんざりしながらもやり続ける。このような鉛筆や消しゴムの使い方は、初めてであったろう。</p> <p>・ウォーミングアップ課題2 「12分割の四角の中をすべて違う色で塗り分けよう」</p> <p>アクリルガッシュで色を作り、隣り合う色の配色を考え、筆でむらなく、いねいに12色塗り分ける。学生は真剣に集中してやった。その結果、美しい作品が完成した。以上のウォーミングアップ課題の他に、今回はできなかったが、例えば定規なしでまっすぐの線を引く、カッターナイフを使ってきれいに切る、大きく絵が描けることが考えられる。</p> <p>これらの基本動作がスムーズにできれば、表現力も次第に向上する。たとえ偶然出来た形や色でも、その中に美しさやおもしろさを発見できるはずである。こうしたウォーミングアップの後、うまく描かなくては・・・というプレッシャーが薄らいで気軽に制作に向かうことが出来たのではないかと思っている。</p>			

授業改善のための工夫			
科 目	健康・スポーツ論		
所 属	幼児教育科	氏 名	関 智美
<p>本科目の授業目標は、健康・体力について、各体力要素に応じた効果的な体力づくりの方法を理解させ、また、生活習慣病の原因およびその予防方法について理解させて、スポーツ・運動の生活化を図ることである。現代の3大死因は生活習慣病であるといわれているが、発症という結果として現れるまでには長い期間を要するため、日々の生活習慣の問題点に気づき、行動を変容させることはなかなか難しい。一方、いわゆる「やせ願望」は若い女性に依然として根強く、また若い男性は、筋力アップなど体力の向上に関心がある。これらのことから、一般論としてではなく、各自が自分自身の問題として捉え、自己の将来像を具体的に描くことから、知識の獲得と理解度を高めるようにしている。方法的な工夫としては、次のような取り組みをしてきた。</p>			
<p>1. ワークシートの活用</p> <p>自分の身体についてイメージを描かせ、10年後、20年後、そして死を迎える時にどうなっていたかを記入させる。どんな身体になりたいかを明確にし、そのためにいつ、何をすればよいのかという疑問を持つことで、知識を得ることへの動機付けに役立っている。</p>			
<p>2. タイムリーな話題の活用</p> <p>例えばオリンピックなど、興味のある身近な話題を適時取り上げ、関連させて説明することにより、講義内容への関心を高めている。</p>			
<p>3. 資料の配布</p> <p>詳細な説明のために必要な補助資料のみでなく、講義内容のキーワードと、キーポイントとなるような図をまとめて資料として配布し、講義の流れを把握しやすいように配慮している。</p>			
<p>4. 視覚教材の活用</p> <p>資料だけでなく、OHP や、ビデオ教材の利用により、映像として印象付けて、記憶に残りやすくしている。</p>			
<p>5. 学習方法についての工夫</p> <p>試験を持ち込み無しとすると、ノートを取らない学生が多くなり、これらの学生は講義内容の理解度も低かった。そこで自筆ノートのみ、持ち込み可とした。これによってほとんどの学生が、自分でノートを取るようになり、理解度は高くなった。</p> <p>しかしまだ、板書を機械的に書き写しているだけの学生は、この方法によっても理解度は低く、次に、用紙1枚にまとめた自筆メモのみ、持ち込み可とした。これによって、講義内容を復習し、自分でまとめることにより、理解度は高くなった。</p> <p>しかし、機械的に書き写した板書をできるだけ小さい文字で1枚の用紙に収めているだけの学生は、やはり理解度の向上は見られなかった。そこで次に、要点を取り上げた復習のためのテストを行い、持ち込みは無しとした。これによって、講義内容を理解しようとする姿勢が見られるようになった。</p>			

授業改善の試み			
科 目	健康・スポーツ実習		
所 属	幼児教育科	氏 名	智原江美
<p>本科目のねらいは各種の運動やスポーツに親しみ、生涯にわたって運動を続けられるような自分にあつた運動・スポーツ種目を習得することにある。授業ガイダンスの際に、受講するにあたって個々の状況を把握するためにアンケートを実施しているが、学生が「体育」に対して持っているイメージを尋ねると、小学校では「楽しい」、「好き」というイメージを持っているものが多いが、中学・高校と進むにつれ「体育」に対して良いイメージを持つものが特に女子で減少している。体格などの発育・発達に伴い、次第にからだを動かすことが億劫になっていくことも原因と思われるが、トレーニングを中心とした内容の授業であるため、「しんどい」、「おもしろくない」というイメージを持っているものも少なくない。体育の授業を生涯スポーツに結び付けるためには、好きな種目を行い体を動かすことの楽しさ、気持ちよさを味わって楽しい経験をするのが良いイメージにつながると考えられるため、アンケートでは授業で行いたい種目についても尋ねている。施設・設備の制約もあり、あがってきたすべての種目には対応できるわけではないが、可能な範囲内で学生の希望に沿うように心がけている。ラケット種目を好む学生が多い場合は、バドミントン、卓球、テニスの授業回数を多めに組み込む。また、屋外種目を希望するものが多い場合はミニサッカーやソフトボール、フットベースボールなどを組み入れるといった、授業の目標、シラバスを超えない範囲で、多くの学生が楽しめるような種目を取り入れる。また、最近の学生は技術練習を嫌いすぐにゲームを希望する、同じ種目を1~2回実施すると興味がなくなる、ルールを理解しようとせず独自のルールで適当に行おうとする傾向が多く見られる。授業として運動・スポーツを学んでいる以上、その種目を行うにあたっての最低限の技術・ルール・マナーを習得することが目標であるが、技術習得のみの授業にならないよう、学生の要望に応じたいろいろな組み合わせのゲーム、簡易ルールや受講者の実態に合ったゲームを提供できるようにゲームの実施の仕方やルールを設定を工夫している。</p> <p>また、球技中心のスポーツ種目のみを取り上げるのではなく、毎回ストレッチ体操を取り入れ、けがの予防や疲労回復の方法について知らせたり、体力テストの実施により自己の体力の把握し、万歩計を貸与して1週間の歩数を測定するなど、自己の健康管理能力を養うきっかけになるような取り組みも行っている。「これまで歩数を測定した経験がなく、思った以上に歩いていないことがわかった」という感想がよく聞かれる。このほかに、2人組みの体操を取り入れ、他人との接触や協応動作を経験する機会を取り入れたたり、準備運動に縄跳びや鬼ごっこなども取り入れることで運動量が確保できるように心がけている。体力テストの結果は個々のデータに全国平均も加えて各自に返却し、平均値に達していない項目は少しでも高められるよう説明を加えているが、もっと詳細な分析や、生活習慣についての質問・指導も実施していく必要があると思われる。</p>			

講義の工夫			
科 目	家族社会学		
所 属	幼児教育科	氏 名	中田奈月
<p>《講義形式》</p> <p>ビデオプロジェクター、パワーポイントの視聴覚メディア機器を使用して授業を展開している。また、毎回リアクションペーパーを課し、そこに書かれた質問や要望は次回の授業で紹介している。授業評価はリアクションペーパーと学期末論文で行っている。</p> <p>《講義の工夫》</p> <p>■学生からのフィードバックを促す</p> <p>学生からのフィードバックを促すことによって、学生の理解度の確認することができるだけでなく授業を活性化させることも可能になる。そこで、講義に関する質問は、授業中の発言のみならず、電子メールや毎回課すリアクションペーパー等でも応じることを事前に伝えている。リアクションペーパーや電子メールは、授業中に発言や質問をすることを苦手とする学生にも発言や質問をするチャンスを与え、学生の理解度を毎回チェックしながら講義をすすめることができるだけでなく、優れた学生の成果を共有することができ、学生を授業に巻き込むことが可能になる。</p> <p>■分析力を高める</p> <p>講義の最後に1回だけレポートを書くというスタイルの場合、単発的で、学生に論文作成や分析のスキルが身につかず、その内容は単なる作文や感想文に終わってしまう。学生にとっても、課題を提出してもレポートそれ自体のリアクションが返ってこないまま成績だけが通知されると、自分のレポートのどこが問題だったのかが分からず、向上への意欲を失うことになると考えられる。それを防ぐために次のことを行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数回、社会学的視点から分析をしてもらい、どのようなものが「分析」かを身をもって理解してもらおう。さらに分析結果を学生同士で批評しあう。 ・優れた分析を教員が学生に紹介し、その成果を学生が共有する。 ・学期末論文の作成前に、レポートの形式、社会学的分析内容や方法に関する講義を行う。 ・分析方法や分析結果の見本を事前に学生に提示する。 ・学生の分析結果を教員が添削して返却する。 <p>■授業時間外の学習を促す</p> <p>質問等は電子メールでも応じることを学生に伝えている。学生から申し出があれば、授業で使ったパワーポイントのデータや参考資料を学生に渡したり、データをインターネット上に公開したりしている。また、授業で紹介した学説については、学生が直接原本にあたるように引用文献を提示したり、その学説に関連する国内外の参考文献を紹介している。</p>			

授業改善の試み			
科 目	情報処理演習 I		
所 属	幼児教育科	氏 名	中村妙子
<p>情報処理演習 I は、パソコンの基本操作やインターネット利用を習得するとともに、日本語処理能力を高めるための演習授業である。今年度は、2つのことに重点をおいて改善を試みた。</p> <p>第1は、使用する本の改善である。これまでは、市販の本を使用し、日本語処理能力が向上するようになってきた。この科目を担当するにあたり毎年苦勞することは、本の選定である。市販の本は、大きく2つのパターンに分かれている。一つは、日本語処理方法を説明することに重点を置いた解説書で、演習問題は少ない。もう一つは、ドリル形式の本で、演習問題が主になっており、説明が分かりやすく書かれていない。</p> <p>学生にとっては、色々なツールの使い方やレイアウトの仕方が分かりやすく書かれており、そのことを頭で理解するだけでなく、キーボードやマウスを使いながら例題を演習し、技術向上ができる本が求められる。そのためには、解説書とドリルの2冊が必要となるが、学生にとっては、金銭的負担がかかる。</p> <p>そこで、今年から日本語処理方法を理解し、その能力を高めるために、“wordを使いこなそう”という冊子を作成した。これは、解説と練習問題をミックスさせたもので、解説には、1つ1つの項目に対し、画面をハードコピーしながら作成し、ツールの使い方が一目で分かるように工夫を行った。そして、1つの項目に対しては、いくつかの練習問題を作った。全体の流れも、技術が向上しやすいように系統立てるように配慮した。この冊子を用い、項目ごとに説明を行い、その後練習問題をするることにより、以前よりソフトの使い方が理解しやすく、日本語処理能力が高まることを期待した。</p> <p>学生に“この冊子を使つての授業はどうですか”と問うと、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本代がいないから助かる。 2. 画面がそのままコピーされているので分かりやすい。 3. 練習問題が解らないとき、説明を読むと分かる。 4. 経験者には簡単すぎる。 <p>などの返答があり、初心者にとっては授業の改善が見られたと思われる。</p> <p>今後、経験者に対してもさらに技術を向上するための改善法を考えていかなければならない。</p> <p>改善第2は、今年からサーバー使用が可能となったので、そのサーバーを利用することである。サーバーに回収と配布のフォルダーが作成され、教師と学生の両者が使用できるように設定されているので、そのフォルダーを有効に使用した。</p> <p>回収フォルダーの中に、さらに学生1人ひとりのフォルダーを作り、授業ごとに自分のフォルダーに保存するよう指示した。そうすることにより、各自の進み具合がわかり、理解していない学生、進み具合の遅い学生がわかり、個別の声掛け、指導を行うことが出来るようになった。</p> <p>また、配布フォルダーに準備していたデータを保存しておけば、学生がそのデータを開くことができるので、授業を円滑に行うことが出来るようになった。</p>			

授業改善の試み				
科 目	乳児保育			
所 属	幼児教育科		氏 名	西村真実
<p>・発達表の作成</p> <p>段階を追って発達の順序を把握できるように、予め枠組みを作っておいた発達表に、学生が授業ごとに内容を書き込む。授業が終わるたびに綴っていくため、最終的には乳児期の月齢を追った発達表となる。内容については、視聴覚教材等を用いて学生ができるだけ自分の目で確かめ、理解が進むように配慮した。</p> <p>→発達表の中身は、全体的に板書をそのまま写したものとなっている。発達についての体系的理解が進んだかどうかは疑問である。</p> <p>*次年度はワークシートスタイルを思案中。</p> <p>・玩具を用いた子どもの発達と遊び理解</p> <p>まず玩具に触れて、「いつごろ（年齢・月齢）」「どのように」「何を楽しむ」のか、ということを考えさせ、解説を加えていく。子どもの意欲と発達を関連づけて説明し、そこへの配慮を強調する。</p> <p>→「おもちゃ」とは、ただ単に「子どもを遊ばせるためのもの」ではない、発達とも関連するものなのだとの認識を新たにさせた様子であった。</p> <p>*手作りおもちゃの作成を課題として与えた。提出されたものを学生の目で評価する。他者の作品を評価することで、手作り玩具作成上の配慮等を再認識させる予定。</p>				

保育士高等養成教育機関における自然体験学習（フィールドワーク）の導入とその効果

科目	子どもと自然		
所属	幼児教育科	氏名	前迫ゆり

【教科内容改善の特徴と視点】

子どもの心身の成長において、生物へのいつくしみや理解、自然への興味が大きな意義をもつものであり（河合 2003）、大学で実施されるフィールドワークが学生の自然観や生命観の育みに有効である（田羅 1998、前迫 2002）。大学周辺は自然環境に恵まれている（鎮守の森や奈良公園などがあり、植物および野生動物などの生態観察も可能）ため、地域環境を生かしたとりくみを行っている。



図 奈良公園における自然体験学習（上）とその後の実験室でのとりまとめ（左）

フィールドでの観察や調査を通して、将来、保育士あるいは幼稚園教諭をめざす学生の自然観形成をはかり、かつ問題解決能力など自然事象にたいする科学的解析能力の習得をめざしたいと考えている。さらには保育現場で必要とされている人間形成と野外での柔軟な対応ができることも視野にいれて授業を進めている。

独自のアンケート調査を実施し、本授業が学生の自然観および資質を高め、専門教育に寄与しているかという授業評価を行い、学生と社会のニーズにあった教科内容の改善につとめている。

【授業実施上の効果と問題点】

フィールドワークおよび直接体験を通して、自然への理解やデータ収集・解析への興味につなげることは、幼少期における自然体験が希薄な学生の感性を育むことにも有効である。学生への授業評価は独自で行っており、後期授業の12月に中旬に学生のアンケート調査を実施した（N=60）。「1. たいへん思う、2. やや思う、3. あんまり思わない、4. 全く思わない」の4段階で7項目について調査を実施した結果、本授業の総合評価として良い（1または2）とする回答は98%、本授業の特徴であるフィールドワークや体験学習について効果があったとする回答は98%、将来保育の現場で役に立つと思うかとする尋ねについても95%が良い（1または2）と回答しており、概ねよい評価を受けたと考えている。一方、90分という限られた時間枠や学生数が多い場合には実施が難しい。フィールドワーク実施に対する大学サイドの柔軟な対応と理解が望まれる。

【授業（教科内容改善など）に関する報告者の著作など（2004年以降）】

子どもたちの野外活動を記録しよう「保育の創造を支援するコンピュータ」。保育出版社（印刷中）2005。地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学際的基礎研究。平成15年度・16年度文部科学省 私立大学教育研究高度化推進特別補助 学術研究推進特別経費報告書（編著者 前迫ゆり）。

2004. 地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成校の課題と視座 -奈良県内保育所の実態調査を通して-奈良佐保短期大学研究紀要 12: 27-44. (他 4編) 前迫ゆりほか

2004. 短期大学におけるネイチャーゲーム初級指導員養成講座実施報告奈良佐保短期大学研究紀要 11: 55-58.

プリントの工夫とその活用方法			
科 目	養護原理		
所 属	幼児教育科	氏 名	松本しのぶ
<p>(改善の試み)</p> <p>当初、配付するプリントについては、教科書に沿った形で項目のみをあげ、口頭で述べたことを記入する方式をとった。しかしながら、「聴き取った内容を各自でまとめて書く」ことは、学生間で力量に大きな差があり、大半の学生は講義内容が理解できない様子であった。そのため、重要な語句のみを空欄にし、講義中に学生が書き込む方法をとった。</p> <p>空欄内に埋める語句は、板書をする学生はただ書き写すのみとなり、また、後からでも書き込むことができるため真剣に講義を聴かない場合が多かった。そのため、あえて板書をせずに基本的には口頭のみで伝達するようにした。その際、口頭のみではわかりにくい語句や漢字が難しい語句、長文のみは板書をするようにした。また、前に行った単元で出てきた語句など、繰り返し出てくる重要なポイントについては、こちらが解答を述べるのではなく、学生に答えさせるような声かけを行い、知識の定着を図った。</p> <p>(成果)</p> <p>上記のような方法で行うと、学生は語句を埋めなければならぬと集中して講義を聴くようになった。また、聞き取りにくかった部分やわかりにくかった部分は空欄が残るため、学生もどこがわからないかが明確となったせいか、講義中、講義後の質問など学生からの発言が増加した。また、前回までの講義で出てきた重要語句について答えさせる取り組みによって、学生はそれまで学習したプリントや教科書を見直すことを行うようになった。15回の講義終盤においては、一部の学生は、事前に配付したプリントの空欄を教科書で事前に調べ、内容を確認しながら講義を聴くというような方法もとっており、自己学習を深める上でも役立った。</p> <p>しかしながら、講義を聴かずに講義後に他学生のプリントの空欄部分を丸写しする学生もいるため、今後はそのような学生に興味を持たせるような講義方法の検討が必要である。</p>			

学生参加型の授業を目指して			
科 目	児童文化		
所 属	幼児教育科		氏 名 築瀬正子
<p>はじめに：近年の学生の無気力は目に余ると言われて久しい。授業中眠ったり、携帯でメールを打つ姿はよく見られる。しかし私は学生の本質は今もそれ程変わってはおらず、こちらが適切な刺激を与えれば生き生きと勉学に取り組むという信念を持ち、学生を授業に参加させることを心がけている。</p> <p>1. 展開：児童文化は前半が基礎演習、後半を講義形式としている。保育士の国家試験にも言語分野を試す科目があり絵本の朗読が課せられている。また学生が教師として前に立つためには、良く通る声と明確な日本語を話すことが必要である。そこで前半の演習では声を発することを重点的に展開している。</p> <p>1) 具体的展開例－基礎演習</p> <p>①腹式呼吸のマスター②大小自在な発声が出る③滑舌の練習により一つ一つの日本語がクリアに発せられる④関西方言と標準語が話せる2言語話者となる の四つを目標に練習をする。③では日本人が不得意とする「サ」行や「ラ」行も基礎練習を積み重ねると少しずつ改善されていく。④に関しては標準語を話すよう指導している就職先も多い。基本練習が終わると次に練習するのは絵本の朗読練習である。発声、抑揚、間に集中しながら2人一組で読みあわせをする（ペアワーク）。少しずつ人前で朗読することに慣れた後に、全員の前で朗読をする（全体ワーク）。それを4つの観点から批評しあう。希望者にはビデオ撮影をし、それを見ながら批評をする。学生たちは2種類のワークで平均5、6冊の絵本を知ることになり、15回の授業で触れる絵本だけでも50冊程度は知ることになる。</p> <p>2) 具体的展開例－講義</p> <p>年度によって内容は異なるが、①西洋文化の中の絵本 ②マザーグースを通して子供のわらべ歌に触れる ③子供と言語などを組み合わせてわかりやすく講義する。また出来るだけ多くの絵本のタイトル、内容、評価を知るために70冊程度の絵本レポートを課している。</p> <p>2. 成果</p> <p>演習部分では少しずつ調音や滑舌が出来るようになり、人前で絵本を読むことを楽しむようになった。また就職試験でも絵本の朗読分野では成果を挙げている。講義部分でも数多くの絵本に触れることが出来た。絵本レポートを仕上げると合計100冊以上の絵本を半期のこの授業で読むことになり、学生は達成感を持たすことが出来た。</p>			

ビデオ（映像）を効果的に活用する工夫について				
科 目	形態別介護技術			
所 属	専攻科	福祉専攻	氏 名	奥田眞紀子
1) 取り組みのきっかけ				
<p>理解を助けるために、心や体の疾病や障害の状態や、実際にその状態で生活している様子を映像（主にビデオ）で示すことをできるだけ多く取り入れている。</p> <p>しかし、私が担当した1年目（16年度）は、こちらが期待したほどの驚きの表情や、興味が増したような目の輝きが見られず、実習で同じような対象者に会った際に、ビデオの話を持ち出しても、印象に残っていないという反応がみられ、大きな効果はなかったと自己評価した。</p>				
2) 原因の分析				
<ul style="list-style-type: none"> ・視聴の目的の理解が不足している。 ・どのような内容か理解していないため興味が湧かない。 ・薄暗い中で、小さいビデオ画面に集中していただける時間は15分程度である。 ・ビデオの内容を理解できるだけの基礎知識がなく、興味が湧かない。 ・内容が難しいため理解できない。 				
3) 今年度の取り組み				
2) の状況を踏まえて行った改善点は、				
<p>① ビデオはその項目のまとめと振り返りに使用し、その疾病や障害をある程度理解したうえで見る。（見るタイミングの検討）</p> <p>② ビデオを見る時間と目的、おおまかな流れをあらかじめ説明する。その際に、内容の流れと考えるポイントを記載したレジюмеを作成し、そこにメモを取りながら視聴する。（視聴レジюмеの活用）</p> <p>③ レジюмеの質問を取り入れながら、10分～15分で止めて、確認しながら視聴する。（視聴時間は短くする。）</p> <p>④ 見っ放しにせず、終了後はレジюмеを使い、学生の意見を求め、まとめを行う。</p>				
4) 今年度の結果				
<p>取り組みに沿って行った結果は次のとおりである。</p> <p>導入部分で居眠りする学生は減少した。埋めなければならない課題があることで、見て書き取らなくてはいけないという思いから、居眠りに対する抑止力への効果はみられたと思われる。</p> <p>また、見えるところへ自ら移動する学生も増えた。行動が変化する利用者のビデオの場合は、その前で必ず止め、それまでの経過を確認し、共通理解が得られてから次に進んだところ、その変化に多くの学生の表情も大きく変化し、昨年にはなかった反応がみられた。</p> <p>また、映像による提示ばかりを行うと、「疾病、障害をお持ちの利用者＝ビデオで出てきた利用者の状態」ととらえてしまい、同じ疾病や障害をお持ちの利用者に会っても、状態が違うと気付けないという危険性もないとはいえない。その点にも十分に注意を払い、取り組む必要があると考える。</p>				

学生のノート作成を促す講義の工夫				
科 目	リハビリテーション論			
所 属	専攻科	福祉専攻	氏 名	本村清二
<p>学生に、必要項目と併せて授業から拾い上げた重要項目を自主的にノートに書かせることを主目標とした。</p> <p>情報提示は、基本的にパワーポイントを使用した。その作成の際の留意点として、なるべく簡便な表現で単元のポイントのみを示し、アニメーションを多用して、今何を主題にして授業を進めているかの意図が伝わりやすくなるように留意した。</p> <p>また、スライド1枚ごとの説明に時間をかけ、深まりの部分について口頭と板書で強調した。例を多く挙げてエピソードが記憶としてもつながりやすいように配慮した。</p> <p>以上を通して、ノートにまとめやすくなるように配慮した。</p> <p>2回ほど講義を進めた頃に、学生からスライドのコピーを配付して欲しいとの要望があったため、講義前にそれを配付した。そのことでノートの記入が楽になり、口頭での講義内容をより深く聞いてもらえることを期待した。しかし結果は、講義ノートを書かなくても資料が残る事で学生が安心し、講義中の私語が増え授業内容に支障が生じたため、3回ほど資料配付した後配付を中止した。しばらくは、不満を漏らしていたが、私語は減り、授業を聞く態度も好転した。</p> <p>試験において授業ノートの持ち込みを許可し、その活用度に着目したが、半数ほどの学生は期待した内容のノートが作成できており成績も良好であった。残り半数は授業に対する参加姿勢に問題がある学生であり、ノートも他の学生のノートをコピーしたものを持ち込んでいたが成績は概して不良であった。</p> <p>ノートを熱心に作成できた学生は、授業内容もよく理解しており、講師の意図もよく伝わっていたが、ノートを適切に作ることができていない学生は他学生のノートを利用して講義の意図がつかめない様子であった。</p>				

2006年度自己点検評価室

澤田 博
北口 照美
矢和多 多姫子
宮川 久美
関 智美
藤本 さつき
上山 潔
菅田 知栄

2005年度奈良佐保短期大学スタッフ・ディベロップメント報告書

発行日 2006年 5月31日

発行者 奈良佐保短期大学自己点検評価室

発行責任者 自己点検評価室長 澤田 博

〒630-8566 奈良県奈良市鹿野園町806

Tel 0742-61-3858

Fax 0742-61-8054

Mail tenke_n30@narasaho.c.ac.jp